
I can not stand ! **我慢できない!**

空猫月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I c a n n o t s t a n d ! 我慢できない！

【Nコード】

N 8 6 3 0 Y

【作者名】

空猫月

【あらすじ】

「もう、我慢できない」

これ以上、何をすればいいのだろう。耐えるだけなんて、もう嫌だ。あいつのいいなりなんて、もう嫌だ。

でも、飛ぶにはどうしたらいい？

罪を背負って耐えるしかないのか。自ら鎖を引きちぎってもいいものか。

踏み出せない姉と、飛び出した妹。生き別れの双子は、もう一度会えるのか。

宿命に逆らってもがく少女たちの、それぞれの物語。

プロローグ

救急車の赤いランプ。小さな窓。無機質な白い壁。せわしく動きまわる大人たち。騒がしい周りの音は、水中に潜ったときみたいどこか遠い。

「奈津！奈津！！」

父さん。もう、母さんは帰ってこないよ。

知っているけど、なにも言えなかった。なにも言わせてもらえなかった。

父さんは、もう動かない母さんの体にすぎる。そして、泣く。大人の人が、声をあげて。大声で、母さんの名前を呼んで。

ああ。これからどうしようか。

双子の姉は、なにも言わない。ただ、あたしと同じ顔をゆがめて俯いているだけ。

もう、どうしようもない。私にできることは、ただひとつ。

「母さん」

つないだ手を握りしめて、空を見上げることだけ。

プロローグ その2

「暁、お前は今日からこの道場に通いなさい。学校も変わる」
父さんの、厳しい目つき。それだけで、わたしの体はカチコチになる。

「お前は、これからもっと強くなるんだ。いつまでもメソメソしないで、強くたくましくなるんだ。弱虫で泣き虫な自分は捨てる、いいな」

コクンと、うなずくことしかできなかった。父さんの目は、うまく言えないけど異常で。わたしを乗り越えて、どこか違うものを見ているみたいだった。

じわじわと、目に涙がたまる。

おかしな父さんを見るのは、嫌だった。母さんの死に顔は綺麗で、今にもまた瞳を開けそうだったのに。死んだ母さんより、生きている父さんが怖いなんて。こんな自分は、おかしいよ。

「うなずくな！！返事は“ハイ”だ！！」

急にどなられて、たまっていた涙が一滴、頬を滑り落ちた。

「泣くな！！」

「・・・分かった。」

これ以上、なにも言えなかった。

あふれる涙は、長い髪で隠した。

「宵、お前はこの学校だ。もっと女の子らしくなりなさい。」

隣にいた双子の妹はまた違う寮制の学校を指定された。

あんなにもわたしの力になってくれる妹と離れることになるなんて、母さんが死ぬことよりも辛い。

母さん、助けて。

ボクの願いは、幾度となく空に消えていく。

宵の空

今日も、空が青い。

寮にしては大きな窓から、四角く切り取られた空が見える。あの大空に、あたしはどれだけのことを願っただろう。祈って泣くことを、どれだけ繰り返したかな。

あの空の下で、暁は今何をしているのだろう。

そこまで考えて、悲しくなった。空から視線を外し目を伏せると、見慣れたセーラー服が目につく。

ああ、今日もこの制服を着て、女の子らしくおしとやかに過ごさなければいけないのだ。一人称を“私”と言い換えて、優雅にふるまうことを強制される。本当の活発な自分を抑えつけて、柔和な微笑みを一時も忘れてはいけない。

「苦しいな」

小さくつぶやけば、途端に暁のことが思い出された。

あの気弱な姉は男子校を指名され、男として強くなることを要求された。道場に3つも通わされて、心身ともに強くなることを強制されている。

男子校になら、断然あたしの方が向いているのに。そう思わずにはいられない。

活発で思い切りがよくて、いつも先頭をきるのはあたし。スポーツだって武道だって、強いのはいつもあたしだった。姉はただ、隣で微笑んで見てるだけで、でもそれがあたしたちの“当たり前”だった。

なのに。

何を思っ、父さんは姉を男子校に、妹を女子校に指名したのか。理由なんてわかりきってるけど、問わずにはいられない。

「ふう」

一つだけ、ため息をつく。そして、意を決して制服を手取る。あたしがここで頑張らなきゃ。ここでへたれても、何にもならないんだから。暁だつて頑張っているんだから。父さんが望むのはこういうことなんだから。

力づくで自分を納得させれば、あとは感情を消すだけ。何も思わない、感じない、お嬢様らしいお嬢様になるだけ。

「よし、イケる」

大きく伸びをして、あたしは無表情になった。

そう、あたしは機械。父さんのいいなりになるための、高性能なロボット。

鏡を見て微笑みを作ると、寮には広い部屋から優雅に出る。階段を下りて、食堂に。朝食をとって、校舎に。

いつも通り、機械的な毎日。

性格が、作り笑いが、心臓が、あたしの空が。壊れる音に、知らんぷりしかできないんだ。

暁の空

「おはよう」

空に向かつてつぶやけば、母さんが優しく笑ってくれる気がする。いつも見守ってくれていて、いつだって笑いかけてくれている気がする。その隣に、宵の姿が見えることも少くないけど、それが逆に嬉しかったりする。

ふっ、と笑って目を伏せる。

宵は今、何をしているだろうか。動きにくいのは嫌だ、とスカートを意地でも履かなかった女の子は、今女子校でセーラー服を着ているだろう。あれだけ毛嫌いしていた“お嬢様”を熱演しているのだろうか。

「宵」

逢いたい。片時も忘れたことのない、自分とそっくりで、それでいて、自分よりも眩しかったあの笑顔。

「はあ」

ため息をひとつついて、しんみりした空気を吹き飛ばす。

癒しの場面は、これで最後だ。学校へ行けば、いつも通りの戦争が始まる。男の喧騒と、汗と、薄汚れているプライド。それらが埃っぽい教室で、激突しては崩壊を繰り返す。わたしはそれに、目を逸らし、自分を守ることしかできない。

けれど、それが父さんの望んだ強さなら。

「やってやんよ。」

気弱な自分を隠すための、汚い言葉と崩れた身なり。

もうオレは、弱くなんかない。強さなんて、とっくの昔に手に入れた。

だから、宵に逢いたいよ。強くて優しくて、双子なのに体格が一回りも小さいあの妹に。

徒歩十分の学校。正門から、もう戦場は始まっている。

「よう、暁！」

男友達は、わたしを完全に男だと思っている。

そりゃそうだ。ありとあらゆる道場に通っていたせいで、全身にむらなく筋肉がついている。その上、身長も170？はある。男に比べれば小さいし、体格も華奢なほうに入ってしまうが、女にしてはでかいからばれない。

「おう。」

声だつて、無理やりだけれどそれなりの低さだ。

ばれない。逆に言えば、女だと気づいてもらえない。

それが、嬉しいことなのか悲しいことなのかは、もう分からなくなってしまった。

「あいかわらず、馬鹿なことやってんな。」

今のわたしにできることは、男らしく男を貶すことだけ。

宵の風

ふっと、風が吹いた。

二つに結った髪の間隙を、スルスルと風が通り抜けていく。
カタン。

小さな音とともに、力が抜けた。手に持っていたフォークが、趣味の良い綺麗な食器の上に落ちていく。あたしの好みに合わせられていて、栄養バランスも考え抜かれ、なおかつシェフの自慢の腕が思う存分ふるわれた料理。夕食だけは個別がいいと懇願して、特別に作られた食堂にはないメニュー。

美味しくない。

あの子がいなければ、食事なんてぜんぜん楽しくない。食事だけじゃなく、学校も授業も、毎日が楽しくない。暁、今どこにいるの。今、なにしてるの。そんなことばかり考えているから、ここにきてもう体重が増えない。身長だけ伸びて、体重は減る一方になってしまった。

ああ、もうどうしよう。

頭がいつぱいになって、涙が溢れそうになる。あわてて顔を上げると、開けっ放しになっていた窓が視界の端に写った。

「あれ、いつ開けたっけ」

窓辺に近づいてみれば、怪しい人影。

ぴたりと、動作が止まった。こういう場合、お嬢様は悲鳴を上げるものなんだろうか？あたしだったら、迷わずこの人影に跳びかかるけれど。でも、あたしは普通のお嬢様じゃないから……。

「やあ」

ボタンー！

とっさの行動だった。思わず、窓を勢いよく閉めてしまった。それもお嬢様にはあるまじき勢いのよさで。

ガンガンッ。

たたかれ、揺らされる窓。ここは一階だから、大人が立てば余裕で届く高さ。だからこそ、何をされるかわからない恐怖が、じわじわと足の裏から這い上がってくる。

「何もしないから！開けて！！」

くぐもって聞こえる、男の人の声。どこかで聞いたような気がしないでもないが、どう反応したらいいのだろう。こんなとき世間のお嬢様はどう反応するのだろうか。

しばし迷ったあと、思い切って窓を開けた。これが誰なのか知りたし、もうお嬢様がどうだとか考えるのに疲れてしまった。

カタンという小気味いい音とともに、ぶわっと開く窓。外には、

「やあ、宵ちゃん！」

「想太さん！！」

馴染みの大学生、想太さんがいた。

「え？どうしてここに」

想太さんは、近くの本屋でアルバイトをしている。何かと話しやすいので親しみやすい、あたしでも一緒にいて楽しいと思える数少ない人の一人だ。

「宵ちゃん、暇してると思って」

「だからって」

こんなところにまでこなくても、とは言えなかった。一人きりだったらボロボロ泣いてしまっていたのは確かだし、だれか親しい人がいることで孤独を少しの間忘れることもできるから。暁の隙間を埋めてくれるのは暁だけなんだけれど。

「宵ちゃん」

「はい」

「結婚しよう」

「は？」

こんな風にわけのわからない軽口をたたき合うのも、たまにはいいかもしれないと思えた。

暁の風

「相変わらず、少食だな」

「だから小っせーんだよ」

昼食のメロンパンに文句を言う、悪友二人。

「うるせーな。足りるからいいんだよ」

毎回毎回、文句を言われるのに疲れ、今はもう適当に流すことにしている。

「けどよー、」

口をとがらせながらお弁当の肉じゃがを口に運ぶ眼鏡、朝倉唯人あさくら ゆい。少食だの何だのと文句をつけてた奴。

「足りねーよ、そんなのじゃ」

売店のカツサンドを口に運びつつ、つばを飛ばしてくる茶髪、喜き念ねん芦ろ威い。わたしのことを華奢だの小さいのとからかってくる、かなりウザい奴だ。

「うるせー。」

ぼんやりと受け流して、窓の外を見る。名前も知らない鳥が、一匹で大空を悠々と舞っていた。

いつからだろう。ふとした瞬間に、いつも考えてしまう。宵がいなくなつて、たった一人になって、食べるもの食わず、睡眠さえも不十分で、今生きているのが不思議なくらい。いつからだろう、こんなに空を眺めるようになったのは。

「なーに、ポーっとしてんの」

「またいつもの癖かよー」

頭を小突かれて、はっと我にかえる。

「誰のこと考えてんの」

冷静な唯人に、小さく

「妹」

とだけ答えた。

「いつもいつも、そればかり。少しは女のこととか考えないの
よ」

「芦威とは違うんだよ」

最後の一口を飲み込んでしまってから、手をはたいて立つ。

「屋上行ってくるわ」

この学校に入ってから、屋上だけが唯一の居場所となっていた。
大きな空が広がる下、少しでも宵の近くにいれるような気がして。
宵に自分の気持ち伝わるような気がして。

別に、唯人や芦威が嫌いなわけじゃない。ただ、静かに休める場
所がここしかないだけだ。どうも、男子校というのは騒がしくてい
けない。わたしの気質にあっていないと思う。

屋上に出れば、秋の気配を含んだ冷たい風が、まるで全てを奪い
去ってしまうかのように強く吹きつけていた。

わたしは、その風が少しでも宵の匂いを含んでくれはしないだろ
うかと、大きく大きく息を吸うのだ。何度も、何度も。

愚かしいくらいに。

宵の光

結局、想太さんは何もしないで帰って行った。軽口を叩き合って、楽しくおしゃべりをして、あたしが食べ残した夕飯を食べてくれたりもして。それで終わり。

その他に何も無い、ただただ長閑な時間だった。

胸元を過ぎた長い髪を梳きながら思う。

長閑だと思つたのはいつぶりだろうか、と。あたしの時間は、今でも暁と一緒にいた時から動き出しではない。ずっとずっと、暁のことしか考えられない。

けれど、今日は久しぶりに、暁ぶりに長閑だと思った。ずっとずっとこんな時が流れていればいいと、そう思えた。想太さんと一緒にいるのは、暁と一緒にいるような不思議な安心感があった。

そういえば。

想太さんは、一体何がしたかったのか。ただおしゃべりするためだけに、やたらと警備の堅いこの学校に忍び込んできたとは思えない。何か、目的があったはずだ。けれど、その目的がよくわからない。

熱いシャワーを浴びながら、このまま溶けてしまえと思う。

自分のように無価値な人間は、このまま溶けて消えてなくなってしまうのが相応しい。思い悩んでいるときは、特にそう。何もわからず、生み出さないのならば、消えてしまえばいいのだ。

誰かもわからないくらい、誰にも気づかれなくらいにひっそりと、静かに。

どうも、今日は思考がネイティブなようだ。さっきから、悪い方向にしか考えられない。

こんな日は、

「寝よう」

そう、寝てしまるのが一番だ。

何も考えず、なにも知らずに眠りに落ちてしまえ。

愚か者め。

暁の光

「暁 ほら起きろ、暁」

ゆっさゆっさと体を揺さぶられる。

「んだよ」

良い夢を見ていた気がするのに。もう少しで、宵と会えたのに。目を開ければ、唯人の顔越しに満天の星空が見えた。そうか、もう冬が近い。空気が澄んで、星が綺麗に見える。

「んだよって、何だよ。全く、屋上で寝たつきりそのままって、ガキか」

「るせー」

唯人の手を借りて、起き上がる。

いつも思うが、唯人は保護者みたいだ。こつやつて時を忘れて寝てしまえば、必ず起こしに来ってくれる。ご飯を忘れれば、必ず自分の分を分けてくれる。そんな自己犠牲がなんだか母親と重なって苦しくなることもあるけれど、そんなことはどうでもいい。

「暁、帰るよ」

ぐつと、ちよつとした一言に泣きそうになる自分がいる。そのことが、わたしにとって大問題だ。

「唯人、オレ」

「暁」

どうしちゃったんだろう。わけもなく飛び出した私の言葉を、唯人がさえぎる。

「もう寒いんだから、腹出して寝るなよ。」

ほら、母さんみたい。

心があつたかくなるような、くすぐったいような気が広がる。でも、次の瞬間にわたしはどん底へと突き落とされた。

「女の子なんだから」

「は」

ばれた？ウソだ、そんなこと。

目の前が真っ暗になる。もう、この学校には来れない。また、転校するのか。また、違う住居と道場で毎日を過ごすのか。慣れない環境で、拷問を受けるのか。嫌だよ、そんなの。もっともっと宵から離れてしまいそうで。やっと居心地の良くなってきたこの場所を離れるなんて。

「お前、体触られるの嫌がるけど、ばれるからだったんだな。どういう事情があるか知らないけど、心配するな、誰にも言わない」

「唯人」

「心配するな、誰にも言わない」

唯人の目が、あまりにも真剣で。わたしを射抜くようで。繰り返した言葉さえも、重く苦しくわたしの上的にのしかかる。

怖くなった。この人は信用できるけれど、わたしなんか触れていい人間じゃない。そのことを、本能的に悟った。

静かに、屋上を出ていく唯人の背中。

わたしはただ、終わりの時を肌で感じていた。

宵の鬱

じりじりと、体が熱く火照るような、落ち着かない感覚に襲われる。何度も寝がえりを打つうちに、ふっと想太さんの顔が頭の中に咲いた。

今日、唐突に部屋に入ってきて、しゃべって笑って食べて、そして何も残さず帰ってしまった想太さん。本屋さんでしか接点がないのに、どうしてか、よくしてくれる人。

「・・・っ」

じわりと、胸から顔にかけて熱が広がっていく。

なんだ、なんなんだ。この感覚は。

焦って、布団の中へともぐりこむ。すっぽりと布団に埋まると、真っ暗な中で強烈に想太さんが見えた。

・・・これが、恋、というものなのだろうか。

小説で読んだことがある。こんな風に、意味もなく相手のことを考えてしまうものらしい。その人のことを考えるだけで、体中が熱を持ってしまうものらしい。

でも、まさか。

自分がこんな病にかかるとは思ってもみなかった。いや、今だって本当かどうか迷っている、疑っている。

だって、あたしのなかには常に暁のことではいっばいだったから。他の人のことなんて、考える暇がなかったから。暁のことしか考えていないし、別の人が入ってくる隙間なんてないものだと思っていた。

「・・・」

無言で、息を大きく吐く。スツと、胸が軽くなるような、もやも

やを吐き出してしまったような解放感があった。

暁が大変なことになってるかもしれないのに、想太さんとイチヤイチヤして過ごそうなんて思っていない。結ばれようとか、幸せになるうとか、そんなこと微塵も思っていない。

ただ、この気持ちがあたしの本物の気持ちなら。

なにもない天井に、そつと誓いを立てる。誰も知らない、あたしだけの秘密。

まっすぐな気持ちだけは持っていよう。恋のゴタゴタなんて、二次の次。暁と再会してからでも遅くない。ただ、自分に嘘はつかないよう。

誓えば、いつかはどうにでもなると楽観的になれて、母さんが見守ってくれているような気もしてきて、ふわっと眠りに世界に落ちていった。

暁の鬱

憂鬱な気分で、毎日を過ごす。あれから、唯人は本当に誰にも言わなかった。いつも通りに接してくれる。

けれど、逆にそれが不安なんだ。

これからどうなるか予測できない、唯人が何を考えているのかわからない。不安にのみこまれてしまいそうで、どうしようもなく怖い。

「あゝきー!!」

空を見て、またボーっと考える。最近は、宵のことだけじゃなく、唯人のことも考えないといけないから、空を見る機会が増えた。今日の空は分厚い雲に覆われて、泣きそうな重たい色をしていた。

「暁！呼んでるやん」

「あ」

芦威の呼びかけに、しばらく気付かなかった。

「最近えらいボーっとしてるな」

「なんで関西弁」

「どーてもいいでしょ！そこはスルーだ!!!」

・・・芦威のよくわからないハイテンションが、いまだけはちょっと嬉しい。落ち込んでどうにもならないこの気分を、どうにか持ち上げてくれそうな気がするから。

「暁」

しばらく、芦威と二人でギャアギャア騒いでいると、突然唯人が声をかけてきた。

「今日の放課後、ちょっと付き合って」

芦威のおかげで上がっていたテンションが、一気に地の底へと落ちる。放課後、わたしは何をされるのだろうか。脅し？どうしよう、

それしか頭に浮かばない。

「大丈夫、捕って喰うわけじゃないから」

八八八ッ、と見ようによっちや爽快な笑みを残して、教室を出て行った。

「おーっと、男子校禁断のBLか!？」

「ちやかすな、バカ」

芦威のくだらない冗談は、とりあえず流そう。

でも、これからどうなるんだろう。

女であるということがばれば、道はただ一つ。貶されて、足蹴にされて、そして別の学校へポイ。その間に、父さんから「またばれた、修行が足りない」だのなんだのと文句を言われる。それだけ。その他になにか道を用意しているのだろうか、唯人は。

つくづく、読めない男だ。

じんわりと、胸が暖かくなっていくような不思議な感覚が何なのか、今のわたしにはまだ分からなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8630y/>

I can not stand! 我慢できない!

2011年12月11日11時50分発行